

第 13 回 ECE WG 打合わせ要旨 (案)

日時：10 月 31 日 (金) 10:00～12:05

場所：日本工学会事務所

出席者 (順不同、敬称略)：

主査 川島 一彦 (東京工業大学大学院 教授)

委員 高草木 明 (東洋大学工学部建築学科 教授、建築分野)

持田 侑宏 (フランステレコム(株) CTO、電気分野)

森川 岳生 (積水化学工業株式会社 R&D センター R&D 企画グループ、化学分野)

事務局 柳川 隆之

配布資料：

ECE08-13-1 第 12 回 ECE WG 議事録 (案)

ECE08-13-2 ECE プログラム統括責任者の条件と役割 (高草木委員)

ECE08-13-3 化学工学会での講座を設計・企画するときのポイント (小松委員)

ECE08-13-4 ECE WG 検討資料 (永田委員)

ECE08-13-5 ナノテクに関する報告書案 (持田委員)

議 事：

1. 前回議事録確認

10 月 6 日に開催された第 12 回 ECE WG 会合の議事録を確認した。

2. 本年度報告書に盛り込む内容の審議

前回決定した分担に従って各委員から提出された検討結果が報告され、報告書にどのように盛り込むかについて審議を行った。

全体的な進め方としては、川島主査が今回までに検討された内容に基づいて報告書の構成およびアウトライン案を作成し、これに基づいて報告書をどうまとめるか次回に審議をする。ここでまとめたものを 12 月 15 日の上位委員会 (運営会議) に提出し、今後の進め方について判断を仰ぐことにした。

各委員からの検討結果とそれについての審議の内容は次の通りである。

2-1) ECE プログラム統括責任者の条件と役割 (高草木委員)

高草木委員から、ECE プログラム編成のフローとそこでの統括責任者 (ドン) の条件・役割、および売れるテキストの条件の 2 点について検討結果が報告された。前者については、委員会組織を設けて合議制でプログラム編成を行う 2 つの方法と、統括責任者にプログラム編成を一任する方法が示された。後者の手本として斉藤公男著の「空間 構造 物語 ストラクチャルデザインのゆくえ」が紹介された。この本は、著者自らが撮影した多数の写真を基にしている点が高く評価されている。構造、デザイン、実務家を対象としている。

この報告に対する審議の中で出された意見は次の通りである。

* ドンとは、その分野であれば誰もが知っているような影響力のある人間という意味である。

* ECE プログラム企画委員会を日本工学会に設置し、その下にテーマごとに、ECE

プログラム作成検討分科会を置く。ECEプログラム作成検討分科会は当該ECE作成に主としてあたる学協会に置くことも考えられるが、日本工学会に参加する学協会がその垣根を取り払って時代が要請する幅広い分野の課題をカバーするECEプログラムを開発、実施することを考えれば、日本工学会のECEプログラム企画委員会の下に設置するのがよいのではないか。実作業は、担当する複数の学協会が相談してどこかでまとめて面倒を見る形態が実際的かもしれない。ECEプログラム企画委員会は各分野の統括責任者から構成し、〇〇ECEプログラム作成検討分科会は当該ECEプログラム作成に当たる講師陣から構成する。

- * ECEプログラム企画委員会は、上位の委員会として位置づけるべきであり、少なくとも、現在のECEWGという位置づけでは不十分であろう。
- * ECEプログラムとして定着するためには、10年といった時間が必要であろう。初年度はまず1～2コースを立ち上げ、逐次、経験に基づいて手法に変更を加え、フレキシブルに対応していくことが重要である。
- * ドンによる責任プログラム方式では、よいドンを見つけることが大切で、そのためにはある程度の実施案を作っておいて本人に依頼すべきである。「日本の産業競争力向上のため」に重要であることを基本に依頼すべきと考えられる。
- * 業績が本の形で残るとよい。ただ、本の出版には一般に時間がかかるので、講義に使用しようとするタイミングが問題である。企画のときに出版社と連絡を取っておくとよい。
- * 受講実績を名刺に書けるようにすること、ドンにフェロー等の称号を与えてはどうか。

2・2) 化学工学会での講座を設計・企画するときのポイント (小松委員)

小松委員から提出された資料に基づいて、講座を企画するときのポイントについて審議が行われた。審議の中で出た意見は次の通りである。

- * 化学工学会の継続教育では、入社3～5年の研究者、技術者を対象としている。この理由は、専門化が進み大学で教えない分野が増えてきており、企業ニーズとのギャップが大きくなってきていることにある。こういう分野のニーズは今後ますます増大すると考えられるが、こうした分野はECEたり得るかを考えてみてはどうか？
- * ECEと銘打って世に問うからには、今までのCPDとはどこが異なるかをはっきりさせるべきである。日本工学会のECEの特質を主張できるとよい。
- * 異なる分野の技術者の相互研鑽の意味づけを与えるとよい。学際的な点に焦点を当てると日本工学会らしさが出る。
- * 「人間力」もテーマに加える。ただ、直接的に取り組むのではなく、例えば受講を通じて人間力が養われるという主張の仕方がよいのではないか。

2・3) ECEプログラムの基本コンセプトおよびその目指すところ (永田委員)

永田委員から提出された資料に基づいて、昨年度の報告書の第2章、第3章の内容のまとめ方について審議を行った。その結果、提示された内容をベースに、次の点を考慮して、メッセージが伝わりやすいように修正を加えることにした。

- * 構成は、第1章で現状の問題点、第2章でこの問題点を克服するためにCPDと異なるECEが必要である、というようにするのがよい。
- * 平成19年度には、技術リーダーの育成という視点から、バランススコアカードを用いたECEの性格付けを行ってきた。しかし、今年度になって、ECEの性格付けを、日本工学会の特性を活かした単独の学協会では取り組めない継続教育、基礎力向上のためのコース制プログラムと性格付けを変えた。このため、バランススコ

アカードの位置づけについて、中崎委員の意見を求める。

- * ECE プログラムの目的は、ECE と CPD が相互補完的関係にあるという形の位置付けが良いのではないか？
- * ECE と CPD の違いについては、Q&A を作るような形で書いてみるとよいであろう。

2・4) ナノテクに関する報告書案（持田委員）

持田委員から、第5章 ECE の例の中に、新しく学際系の分類を設け、その中に入れるナノテク講座の内容についての提案が行われた。検討の結果、提案どおり、ナノテク講座は第5章の ECE の例に2ページ程度の分量で入れることにした。審議の過程で出された意見は次の通りである。

- * 永田委員の「構造化」の図面にナノテクを当てはめるとよい。
- * 新技術に対する「目利きのセンス」は大切である。空洞化する傾向にある親会社に特に必要である。ただ、企業のマル秘事項になるため、外部での講座に盛り込むのは難しい。
- * この目利きのセンスは、永田委員の資料の中の「白いキャンバス」に共通する。
- * 広い分野の人にわかりやすく書くとよい。「講義の骨格」と関係する技術分野の関係をマッピングしてみるとよい。

次回予定：11月に開催することとし、日時はメールによって調整する。年内にあと1回くらいWGを開催し、本年度の報告書をまとめる。

以上